

貂蟬像の検証

井 上 泰 山

一

中興以来およそ二百年続いた後漢王朝も、靈帝の即位とともに内憂外患にさいなまれ、地方への統率力を失った結果各地に反乱が続出、いわゆる黄巾の乱によつてその地盤は揺さぶられ、ついに存亡の危機に見舞われる。そうした政情不安につけこみ、宮廷警護を口実として都に入り込み、強大な軍事力を背景に着々と勢力を伸ばしていったのが、西域の防備にあたつていた軍閥董卓であつた。靈帝亡き後の董卓は益々専横の度合いを強め、権力争いの混乱に乗じ、靈帝の第二子獻帝を擁立して洛陽から西安への遷都を強行、郊外に豪華な離宮を建造して天子の位をも窺う強大な権力を掌握し、日々横暴な振る舞いを繰り返す。一方、董卓の目に余る蛮行に憤りつつも、孤立無援をかこつていた司徒王允は、自らの屋敷で歌い女として養つていた貂蟬の美貌によつて奇策を案出し、董卓とその養子呂布の心を巧みに手玉にとつて両者を反目させ、董卓を宮中に誘き出

して呂布にこれを討たせる。

小説『三国志演義』(以下本稿では『演義』と呼ぶ)でおなじみの、「連環計」の一節である。好色漢の董卓と呂布との仲を離間させてまんまと破滅に導く貂蟬の二枚舌には、文字通り舌を巻く思いであるが、それはさておき、董卓討伐という大役を果たした後の貂蟬はいつたになつたか。『演義』の描くところに従つて彼女のその後の行動を追つてみると、おおよそ次のような足跡を確認することができる。

董卓が宮中に誘き出されて殺害された時点で、貂蟬は董卓の築いた離宮鄠場に囲われていた。董卓討伐を果たした呂布はすぐさま鄠場にかけつけ、貂蟬を探し出して長安に送り返す²。長安に送られた後の貂蟬の待遇については具体的な記述はないが、恐らくは呂布のもとに妾としてかくまわれ、身の回りの世話をしていたものと思われる。何故なら、続く第四卷「白門曹操斬呂布」の一段において、進退窮まって下邳に逃げ込んだ呂布が援軍を要請すべく単独で敵陣

突破を試みようとした際、妻嚴氏とともに呂布を諫める貂蟬の姿が描かれているからである。嚴氏と貂蟬への未練を断ち切れない呂布は、為す術もなくそのままずると下邳に留まり、酒に溺れて腹心の者にも見放され、ついに曹操に捕まって白門楼で縛り首にされる、という経緯については、よく知られている通りであるが、一方、貂蟬の方はといえば、呂布の死後どうなったかという点に関する詳しい記述は見られず、わずかに、残された呂布の家族とともに曹操に引き取られ、許都に送られたことが簡潔に記されているのみである。『演義』の中では、以後貂蟬の消息が語られることは一切ない。

二

小説の中における貂蟬の活躍とその後の足取りについては、右に見た通りであるが、では、『演義』に取り込まれる以前の語り物の段階では、貂蟬はどのような姿を見せていたであろうか。この点について探るための資料として現時点で依拠することができるのは、国立公文書館所蔵の『至治新刊全相平話三國志』（以下本稿では『平話』と呼ぶ）のみである。以下、『平話』における貂蟬の活躍を追ってみよう。

『平話』においても、貂蟬はやはり、憂国の思いに閉ざされている王允の前に突如として現れる。夜中に裏庭で王允に認められる点も『演義』と同じ設定であるが、ただ一点、『演義』と異なる点がある。それは、貂蟬が王允の養女としてでなく、呂布の妻として登場する

ことであり、この点、いわゆる「連環計」を実行するにあたって、董卓に対する呂布の憎しみを増幅する効果をもつであろうと思われる。何故なら、戦乱によって離別を余儀なくされた愛しい妻に久しぶりに再会した矢先に、己の義父に寝取られたとあっては、英雄呂布ならずとも心穏やかにいられるはずもないからである。貂蟬が王允の指示を忠実に実行に移したことによって、呂布は怒りを爆発させ、屋敷に乗り込んで瞬く間に董卓を血祭りにあげる。董卓の死後、貂蟬がどうなったか、ということに関しては、うち続く呂布の活躍にのみ描写が集中して、明確な記述はないが、当然呂布と行動を共にしたであろうことは想像に難くない。その後の貂蟬の姿は、徐州を失って下邳へと敗走する呂布の前に敗軍にまぎれて現れ、下邳に到着した後も呂布の焦燥感を言葉巧みにまぎらわせて⁵ 歓楽に耽る様子が描かれる。結局、水攻めによって呂布が捉えられて曹操に殺されるまで、呂布の傍を離れなかったものと思われる。しかし、『演義』と同様、呂布亡き後の貂蟬の消息については全く触れられておらず、その後の貂蟬の生きざまをうかがう術はない。

三

右に述べたように、『演義』や『平話』における貂蟬の活躍の舞台は、専ら「連環計」の場に限定されており、色仕掛けによって董卓討伐の大役を果たした後しばらく呂布と行動を共にするものの、呂布が曹操に殺された後は目立った活躍の場も与えられず、いつの間

にか人知れず消え去って行くはかない存在、といったイメージが強い。貂蟬に付与されたそうしたイメージは、こと小説の世界にあってはその後も変わることなく受け継がれ、明代以降さまざまな版本を重ねたにもかかわらず、清代のいわゆる「毛宗崗本」に至るまで基本的に変化はみられないのである。

ところが、ひとたび小説の世界を離れると状況は一変する。中国では宋代から明代にかけて、それ以前に存在した説話や伝説の類が次々に文字化されて後世に伝承されていくが、そうした文字を媒介とした伝承と並んで、というよりも、ある意味では文字以上に重要な役割を果たしたのが、演劇の舞台や巷の講談であった。文化の伝承に対して文字という手段が果たしてきた効用についてはここで改めて述べたてゝるまでもないが、それはあくまでも、手段となる文字を自由に使いこなせるという前提条件が整った上でのことである。

中国のある一定の时空においては、文字という平面的な手段よりも、様々なパフォーマンスを加えて立体的に表現しうる演劇や講談を歓迎する階層が確実に存在していた。このことは、当時の社会を構成する人々の識字率と密接に関連しており、同時にそれは文学や芸能の創作のありかたにも直接繋がっていく重要な問題であるが、本題からは離れるので、ここではこれ以上詳述しない。

さて、話が些か脇道にそれたが、ここで本題にもどって、貂蟬の新たな足跡を小説以外の芸能によって確認しておくことにしよう。まずは演劇空間に現れる貂蟬の姿を追ってみる。実はそこで貂蟬

は小説のそれとは全く異なった形で終末を迎えている。結論から先に述べれば、明代の演劇では、貂蟬は関羽によって斬り殺される運命にあった。以下、この点について詳述する。

明清時代に上演された演目は枚挙に遑がないほどであるが、その中の一部に、「関大王月夜斬貂蟬」なる外題が記録されている。中国の演劇の形態は、時代によっても、又地方によっても様々に異なるが、ここに記録された演目はどうやら元代以降北方を中心として盛んに上演された四幕を原則とするいわゆる「雜劇」と呼ばれる種類のそれであるらしい。残念なことに台本そのものは既に散佚しているため、作品がどのような構成になっていたか、その詳細を知ることは困難である。しかし、外題から窺う限り、少なくともこの劇には関羽が貂蟬を斬り殺す、というプロットが含まれていたことだけは間違いない。しかも「月夜」とあるからには、それは昼間ではなく、夜間に月光の下で行われた。しかし、考えてみれば、関羽が貂蟬を「斬る」とは、いったいどういうことか。王位篡奪を企図した賊臣董卓を除くに功あったはずの貂蟬を、関羽は何故斬り殺さねばならなかったのか。また、それはどこで実行されたのか。「演義」のプロットに慣れ親しんでいる読者にとっては、疑問は深まるばかりである。まずはこの点を明らかにしておく必要があると思われるが、その前に、貂蟬が関羽に殺される、というプロット自体は、実は明清時代の人々にとっては決して目新しいものではなく、逆にある程度なじみのあるものであったという事実を、幾つかの資料によ

って確認しておきたい。

まず、明人王世貞は「見有演関侯斬貂蝉伝奇者感而有述」と題する詩を詠み、関羽が貂蝉を斬るという演目の大筋を五言の古詩によって紹介し、呂布に付き従っていた貂蝉が、状況の変化とともに仇であるはずの関羽に寝返り、挙げ句の果てには関羽に殺されるはめになったことを当然の報いとして受け止めた旨の感想を述べている。ちなみに、王世貞は嘉靖二十六年（一五四七）の進士である。また、同じく明人朱孟震は『河上楮談』において次のように言う¹⁰。

世俗戲文、小説、有斬貂蟬、關索鮑三娘等記、流傳傳會、真偽渾淆；然蜀有關索嶺、又有鮑家莊、不知何也。

発言の主旨はすなわち、世間に流行している戯文や小説の中に、「斬貂蟬」「関索鮑三娘」などといった作品があるが、それらはいずれも、あれこれと尾鱗をつけて伝承されたものであり、真偽の入り交じったものではあるが、しかし、蜀の地には実際に「関索嶺」や「鮑家莊」などと名付けられた峰や村があるのはどういうわけであるのか、ということである。ここに「斬貂蟬」と並んで「関索鮑三娘」なる作品の名が挙げられていることは非常に興味深い。何故なら、両者はいずれも、小説としての三国物語からは見捨てられ、専ら講談や演劇に取り込まれて生き残った、いわば幻の三国説話だからである¹¹。それはともかく、朱孟震は隆慶二年（一五六八年）の進

士であるから、先の王世貞の発言とあわせれば、嘉靖・隆慶の頃にはすでに「斬貂蟬」なる演目が上演され、人々に親しまれていたであろうことが知られる。

関羽が貂蟬を斬るというプロットが、明代以降ある程度一般的に知られていたことを示す資料は他にも存在する。小説『三国志演義』の教ある版本の中で、現存するものとしては第三番目に古い「周日校刊本」¹²の第二巻には、本文の一部に、双行による次のような注釈が施されている。

後操以貂蟬賜關羽，未久，關羽惡蟬言辭反覆，激怒斬之。

この注釈も、明代万暦年間における貂蟬の逸話を示す貴重な資料であるが、注目すべき点はそれだけではない。ここには、貂蟬が関羽に近づくきっかけが曹操によつて作られたものであること、関羽が貂蟬を斬った理由は貂蟬の「言辞反覆」によること、などと、関羽と貂蟬の接点がある程度明らかにされているのである。「言辞反覆」の四文字が具体的に何を指すのかは勿論不明であるし、また、ここにいる関羽と貂蟬のエピソードが具体的にいかなる芸能に基づいたものなのか、その点がいま一つはつきりしないのは遺憾であるが、少なくとも小説以外の芸能（演劇や講談の類）である可能性は高く、ここで関羽と貂蟬の逸話が披露されるということ自体、それが編者の脳裏にあつてかなり親しみ深いものであつたことを示しているで

あろう。

右に挙げた資料以外にも、例えば明の胡応麟¹³や、清の毛宗崗¹⁴など、「斬貂蟬」の逸話に言及している人物がある。明清時代を通じて関羽と貂蟬のエピソードが広く知れ渡っていたことを示しているものと思われる。

四

前章において示した資料によって、明代万曆・隆慶の頃には既に、関羽が貂蟬を斬り殺すという話が一定程度人々の知るところとなっていたことがわかる。また、そのことを仕組んだと推定される演劇も実際に存在していたことまでは確認できるのであるが、如何せん残されているのは雑劇の外題と逸話に関する断片的な記述のみであるため、具体的な状況に関しては謎に包まれたままであった。ところが、近年、この問題をめぐる状況は大きく変化した。「斬貂蟬」に関する空白の部分埋めるに足る作品の一部が新たに発見され、公開されたからである。

問題の書物は中国国内では既に失われ、奇しくもスペインはマドリッドの郊外にあるエル・エスコリアル宮殿の図書室の一隅に十六世紀以来保管されていた。¹⁵一般に『風月錦囊』の名で呼ばれる戯曲集がそれである。この『風月錦囊』については、その存在自体は前世紀はじめに既に確認されていたが、五十年代に入ってようやく斯界の注目を集めはじめ、八十年代に至るとマイクロフィルムの将来

によって本格的な調査が可能となった（一九八七年、臺灣學生書局刊、王秋桂主編『善本戯曲叢刊』第四集所収）。中国においても断片的な論考は早くから発表されていたが、三年前の二〇〇〇年七月、中国芸術研究院の孫崇濤氏、及び中山大学中国古文献研究所の黃仕忠氏による『風月錦囊箋校』が中華書局から出版され、続いて八月には、研究成果としての『風月錦囊考釈』（中華書局）が孫崇濤氏によって公表されるに及んで、同書に対する研究は飛躍的に進展した。エスコリアル宮殿所蔵の『風月錦囊』は嘉靖三十二年（一五五三）に重刊されたもので、一言で言えば、様々な散曲や南戯の曲辞を集めた雑曲集である。その一部に、『精選統編賽全家錦三國志大全』¹⁶（以下「大全」と呼ぶ）と称する上図下文形式の作品が収められている。「大全」の二文字を付す所以は、それが三國物語を描いた複数の南戯や雑劇作品の曲辞を部分的に摘録し合成した「連台本戯」であることによるらしく、いわば南戯と雑劇の合体作（「南雑劇」）であり、「桃園結義」から「單刀会」までの曲辞をおよそ十七の場面に分けて収録している。本稿で問題とすべきは、勿論、貂蟬と関羽に関する記述の有無であるが、第八場から十三場にわたって、まさしく二人の関係を示す部分が含まれているのである。以下、関連する場面について細部にわたって検討してみることとする。

先に述べたように、「大全」にはおよそ十七の場面が描かれているが、細部を統合して、より大きな分類を試みると、全体はほぼ以下の七つの物語に要約される。¹⁸

- (一) 桃園結義 (二) 破黃巾 (三) 連環計 (四) 斬貂蟬
 (五) 千里独行 (六) 三顧茅廬 (七) 單刀会

右のうち、本稿のテーマに関連する部分は、(三)の「連環計」と(四)の「斬貂蟬」である。まずは、「連環計」の後半部で唱われる曲辞を検討することから始めよう。

原本の第十頁めにあたるその部分には、上段の図の最上部に「貂蟬見呂布」(貂蟬、呂布に会う)の五文字が標出されていることから、ここで貂蟬と呂布が顔を合わせるのであるが、どうやら二人は初対面ではなく、もともと夫婦であったらしい。それは、図の両側に標出された「夫妻今日重相見、香閣深闌月再圓」の対句によって示されているが、より詳しい状況を知るためには、唱われた曲辞を細かく分析し検討することが必要となる⁽¹⁹⁾。

【耍孩兒】(旦) 誰想我夫妻今日重相見。恰便似枯樹花開月再圓。想當初烟塵四起遭兵亂。俺間阻不覺三年。往常間香闌深閣重重鎖，今日洞(呵) 眇眼三春似洞天。相會了神仙伴。覷了他煩惱惱惱，好交我兩淚漣漣。

(はからずも、今日この日、夫婦が再び会えるとは。あたかもそれは、枯木に花が返り咲き、月が再び円かなること。想えばそのかみ、戦塵沸き立ち、戦火にのまれ、仲を裂か

れて早くも三年。以前には、奥座敷にてひきこもりしを、今日の日は、仙界に春が訪れたよう。仙女伴う、お人に逢うとは。一目見やれば悩みは深く、目には涙の溢れくる。)

【又】他如今志氣高，歩丹墀文武全。扶王保駕在金鸞殿。我昨宵黃昏月下燒香拜，誰想今日堂中會鳳仙。怎不交我肝腸斷。須臾見面。頃刻離鸞。

(あちらは今や志氣高く、階^{きざし}歩んで文武を備え、金鸞殿にて王駕を補佐す。昨夜は月下にお香を焚きしに、なんとこの日、お屋敷で、鳳仙に会おうとは。いかで断腸の思いせざるや、会えばたちまち別れとは。)

【尾】從今後越添我心中恨，到不如今日休交我重相見。好似路阻藍橋人漸遠。

(これよりは、心の恨みぞいやまさる、いつそ再会せぬがまし、まるで藍橋のたもとで別れ、人遠ざかるにさも似たれば。)

右の三つの曲はいずれも貂蟬によって唱われたものである。貂蟬はある日突然、かつて戦乱の中で離ればなれになった夫の呂布と再会した。「間阻不覺三年」(仲を裂かれて覚えず三年)とあるから、二人は三年ぶりに再会したわけである。その場所がどこであったか、

確かなことは不明であるが、「堂中會鳳仙」(広間にて鳳仙に会う)とあり、また、「金鸞殿」の名が見えることから、恐らくは宮中で催された宴会の席であろう。ここにいう「鳳仙」は勿論「奉先」に通じ、呂布その人を指している。貂蟬が見かけた呂布の様子は、「如今志氣高、歩丹擲文武全、扶王保駕在金鸞殿」(いまや志氣は高く、宮殿の階歩んで文武を兼ね備え、金鸞殿にて王を補佐し天子を守る)として描かれている。宴会の席でかつて生別した夫に偶然巡り会えたものの、相手はいまや高貴なお方の傍に仕えるほど出世した別世界の人。一介の歌い女にすぎない自分の方から夫婦であると名乗り出るわけにもいかず、宴会が果てるとともに再び別れなければならぬ悲しみが、「怎不交我肝腸斷」(どうして断腸の思いをせずにいられましょう)以下に切々と唱われている。最後の曲に、「從今後越添我心中恨、到不如今日休交我重相見」とある。再会したが故に今後ますます苦しい思いをしなければならぬ。そんなことなら、いっそのこと会わない方がよかつた、と嘆いているのである。

貂蟬と呂布との再会の場が続いて、二人の祝言の様子や、「外」と「丑」との対唱による場面が挿入されるが、本題とは直接関係しないため、曲辞についての検討は省略する。

続く原文第十二頁と十三頁において、関羽と貂蟬の接点が初めて明らかにされる。ここでは「正宮・端正好」以下七曲の歌が唱われるが、はじめの二曲は関羽が唱い、それ以外の五曲は貂蟬が唱い継ぐ形式になっている。七曲とも全て、関羽と貂蟬の関係を探るうえ

で重要な内容を含んでいるため、以下、原文と翻訳とを逐一対照して示すことにする。まずは、図の最上部に「關羽嘆張飛」として標出された部分の二つの曲辞を掲げる。

【正宮・端正好】漢張飛是個馳名將。退三軍如虎奔群羊。我則見他生擒呂布如翻掌。我則道黑殺(煞)天神降。

(漢の張飛は名だたる將軍、三軍を退けること、群れる羊を追う虎のよう。見れば張飛は、あたかも掌を返すがごとくに呂布を生け捕り、黒煞神が舞い降りたかのように。)

【滾綉毬】它使一條沉點點丈八鎗。氣烘烘誰敢當。它騎一匹壁(畢)月烏怎生攔當。載(戴)一頂鐵幟頭甲臥秋霜。旌旗按北方。兵戈晃太陽。它在戰場中一冲一撞。逢(着)着的惹禍遭殃。我在中軍帳睜晴望。則見它將呂布活捉着好過那廂。似這等蓋世無雙。

(ずしりと重い、一丈八尺の槍しごき、カッと怒れば齒向かう者なし。畢月烏に跨れば、遮ることなどできはせぬ。鉄の兜を頭にかぶり、鎧はにぶい光を放つ。軍旗は北に向かつて並び(着)兵戈は陽射しを受けて煌めく。戰場にては何度も突撃、出逢えばただちに災禍が及ぶ。中軍の、帳の中で望み見れば、張飛は呂布を生け捕りにして、道は早くも開けたり(着)。こんな男は、世間にざらにはいやしない。)

訳文によつて明らかなように、二曲いずれも、呂布を相手に闘う張飛の勇猛ぶりを讃えたものである。ここでは呂布を生け捕りにするのは張飛の役目であり、関羽は陣幕の中で高見の見物を決めこんでいる。呂布はここに至つて張飛に屈したのであり、従つて、それまで呂布に仕えていた貂蟬も身の置き所を失つたものと思われる。貂蟬によつて引き続き唱われる歌は、そのような状況を前提として解釈すべきであろう。続いて唱われる以下の曲辞を収める図には、その両側に「輕衣緩歩來相見、只願江山屬漢王」なる対句が付されている。ここで貂蟬は関羽や張飛との対面を余儀なくされる。はじめの二曲において、対面直前の貂蟬の心理が描かれる。

【尙秀才】(旦) 俺這里聽就里心中悒悒。莫不是破温侯陣中
猛將。我準備妙語輕言立在傍。定是英雄漢生得性兇剛。我
則索穩重安詳。

(事の次第を耳にして、私の心は穏やかならず。もしかして、陣中で、呂布を破つた猛將ならずや。あたりさわりのない言葉、心に準備し傍に立ち、必ずや、一徹な質の英雄ならん、穏やかに、腰低くして応対せねば。)

【滾綉毬】(旦) 我弓鞋出洞房。金蓮款步忙。我安排着語言
的當。到帳前拜見關張。我尊前按五常。怕甚麼英雄楚霸王。
俺知他兄弟每有些莽撞。我這里鞠躬已準備隄防。假若有問

咱言語。須索將他向。這是我落在他人怎逞強。我待温儉恭良。

(よちよちと、歩みも繁く部屋を出たり。言葉遣いに気をつけて、陣に赴き関張にまみえん。五常の礼儀をわきまえたれば、楚の霸王とて恐るに足りぬが、かの兄弟、些かがさつな質ゆえに、かしこまり、なすべき準備はしたつもり。

何かを尋ねられたなら、相手の意を迎えるが得策。まさにこれ、「囚われの身は強がるべからず」、温厚で慎み深きを装わん。)

貂蟬が関羽や張飛に会うのは、どうやら誰かに強制されたことによるらしい。「聽就里」(内情を聞く)とはどういうことか、指し示す具体的な内容は不明であるが、あるいは、呂布亡き後囚われの身となつた貂蟬に対して、宴席にはべるよう命令がくだつたことを指すのかもしれない。貂蟬は本来歌い女であるから、呂布を打ち負かした張飛や関羽らの祝勝の宴に陪席するよう指示された可能性は高い。指示を受けて、貂蟬はやむなく自分のいた奥座敷を出て宴会場へと向かうが、相手が自分の夫呂布を滅ぼした武將であるだけに、どうにも気がすまない。関羽が硬骨漢であることも側聞している。いざ対面した際には、言葉遣いは慎重に、物腰も柔らかく、できるだけ相手を刺激しないようにと、細かに心の準備をする貂蟬の不安な心理状態が随所に滲み出ている。「囚われの身は強がるべからず」

という、末尾に添えられた一句は、そのあたりの心境をよく物語っている。

残る三つの歌は、関羽や張飛を前にして唱われたものと考えられる。呂布への想いをおさえてしきりに関羽の機嫌を伺い、張飛らの手柄を誇張することで座をもりあげようと必死になる貂蟬の姿が浮き彫りにされている。

【滾綉毬】俺這里忙斟琥珀觴。高板着小叔央。叔叔只飲到日

平西，那時歸帳。只願得漢乾坤永遠安康。軍卒罷戰場。黎民樂四方。將奴這弟兄每在朝為相。誅讒佞定國安邦。那時節千鐘爵祿同皆享。萬里江山屬漢王。統領三綱。

(しきりに酒を勧めつつ、かたや叔父への機嫌取り。陽が西に、傾き行くまでお飲みになって、それから陣に帰られませう。願わくば、漢の国土がとこしえに、安寧保つて戦塵収まり、四方の民が楽しまんことを。朝廷にては兄弟が、そろつて宰相の職を得て、佞臣滅ばし国家を安定させられますよう。その折は、千鐘の爵祿ともに受け、三綱守つて、万里の国土は漢王に帰さん。)

【倘秀才】想當日舉兵戈鎗刀攘攘。都只為呂温侯領兵興將。

都是破魯(虜)成功百戰場。如今八方收土馬，四海罷刀鎗。黎庶少驚惶。

貂蟬像の検証

(想えばそのかみ、兵火起こつて混乱きわまり、呂温侯が兵将率いて戦鬪重ね、賊を破つて百戦百勝。いまや各地の戦塵収まり、全土の兵火も止みたれば、民草は心の安らぎ得た思い。)

【尾聲】俺這裡歸來不去迎闔將。緩歩金蓮入洞房。準備燈前慶晚粧。心間喜悅無惆悵。若遇英雄我立在傍。我兩人此夜明蟾須共賞。

(もどつてきても武人は迎えず、ゆるゆる歩んで閨に入り、燈^{あかり}ともして薄化粧。愁いは消えて心わくわく、かりに丈夫^{ますらお}お越しとあらば、二人そろつて、今宵は月をば共にめでん。)

いづれも、関羽たちの功績を言葉を極めて述べ立て、当たり障り無くその場を何とかやり過ごそうとする貂蟬の苦衷が感じられる歌である。しかし、世には「巧言令色」の喩えもある。極度の饒舌は却つて関羽の神経を逆撫でする結果になったのではあるまいか。ここには関羽側の反応は一切描かれていないが、後の場面を見る限り、手柄をあくまで褒めちぎる貂蟬の言葉を真に受けて、関羽が好印象を抱いたとは到底思えない。それまで呂布に付き従つていながら、呂布が討たれたとなるとただちに掌を返すように態度を一変させる貂蟬。彼女が無理に装う明るい雰囲気と反比例して、関羽の気分は次第に沈んでいったに違いない。貂蟬の差し出す盃を無然とした態

度で受ける関羽の顔が目には浮かんでくる。義に厚いことで知られる関羽が貂蟬に対して最初に殺意を抱いたのは、あるいはこの宴会の席であつたかも知れない。様々に想像をかきたてられる場面ではあるが、限られた曲辞しか残されていない以上、ここではこれ以上の推測は慎むべきであろう。さて、酒宴そのものは何とか無事に切り抜けたかに見える貂蟬ではあつたが、関羽の心に芽生えた憎悪の念はその後も消え去ることはなかつたようである。舞台はいよいよ、関羽による貂蟬殺害の場へと移っていく。以下、章を改めて論じることにする。

五

関羽が貂蟬を殺害する場面は、原文の第十四頁から十七頁までの四頁を費やして描かれている。各頁の標題を、付された対句とともに示せば、次のようになる。

〔夜讀春秋〕（五夜沉沉明月在、好將書史着留心）

〔關羽問貂蟬〕（正是酒淹衫袖濕、果然花壓帽簷低）

〔貂蟬誇關張〕（呂布英雄曾蓋世、貞女變弄巧花言）

〔關羽斬貂蟬〕（形魂杳杳歸陰府、四海揚揚名譽傳）

この標題だけを繋ぎ合わせても、事態の推移は概ね察知することができる。乃ち、まず関羽が夜中に『春秋左伝』を読み耽っている

場面が描かれる。『左伝』が関羽の愛読書であつたことは既によく知られた事実である。『左伝』を読み進めるうちに、その中の記述の一部によって、関羽の脳裏に、貂蟬の不義の行いの記憶が呼び覚まされる。その結果、関羽は貂蟬を再び呼び出して、彼女の心境を問いただそうと試みる。質問の中には当然、呂布に対する評価も含まれていた。関羽としては、貂蟬の口から、呂布をそれなりの英雄として頌える言葉が発せられるものと期待していた。ところが、意外にも、貂蟬は呂布を悪し様に罵つたばかりか、齒の浮くような言辭を弄して、逆に関羽や張飛の活躍を褒めちぎつた。義を重んじることにかけては他の何人にもひけをとらない関羽としては、貂蟬の取つた不義の態度はどうにも許し難い。貂蟬をそのまま生かしておいては、またいつ何時災禍がふりかからないとも限らない。そうした被害意識にかられたのであろうか、結果として、関羽は貂蟬をその場で斬り殺してしまうことになるのである。

右はあくまでも、標題から推測される状況にすぎない。具体的な構成については、やはり原文を細かく検討した上で結論を出す必要がある。関羽によって唱われる歌は全部で十八曲にも及ぶが、『大全』が天下の孤本であり、斯界未見の新資料であるだけに、ここでは煩を厭わずその全貌を分析しておく必要があると思われる。以下、唱われる順番にそれぞれの内容を検討してみることにする。

はじめの二曲では、月夜のもので『左伝』を読む関羽の姿が描かれ、続いて、貂蟬と呂布への回想につながっていく様子が唱い込ま

れる。「英雄、英雄を識る」とは、近世白話文学作品によく見える言い回しであるが、あるいはそうした設定が最初からなされていたのであろうか、ここでの関羽は、既に死んでしまった呂布に対してかなり同情的な態度を見せる。

【中呂・粉蝶兒】（關）明月如淵。向晚燈前。飽看着春秋左傳。正心情想起貂蟬。不由我不生嗔心間。惱汗生滿面。想温侯武藝雙全。也是它遇時乖遭刑憲。滾了刀劍。

（月明かり、あたりは淵のごとくなり、夕暮れに灯火ともして、『春秋左伝』を読み耽る。今まさに、心に浮かぶは貂蟬のこと。覚えず心に癩癩おこり、顔にも怒りの汗満ちる。想えば温侯、武芸は完璧、時運に見放されたが故に、刑罰くらい、刀の錆とはあいなつた。）

【醉春風】他因誅董卓起兵戈，出長安離帝輦。身歸下邳水擁澗。你交他怎生展轉。也只為着貂蟬。因他白門染患。

（董卓誅して兵火は起こり、長安出でて都離れし。下邳に至るも水攻めに遭い、もがく術とてなきものを。もとはといえは貂蟬のため、白門にては病に罹れり。）

「醉春風」曲の末尾にある「染患」の二文字は、二とおりの解釈を許すであろう。文字通り「病に罹る」の意と解せば、白門で最期を

むかえた際、呂布が病に罹っていたことになる。病気で体力の衰えた呂布を捉えるのは、曹操らにとって雑作ないことであつたらう。しかも、病の原因を作ったのは誰かといえば、勿論それは貂蟬その人である。もう一つの解釈は、「染患」の文字を少し広い意味で解釈し、「災難に遭う」の意と考えるものである。その場合、具体的には、白門で曹操に殺害されたことを指すことになる。いずれの解釈に拠るにせよ、呂布を死に追いやった張本人が貂蟬その人であることに変わりはない。当然の成り行きとして、関羽の、貂蟬に対する怒りの感情は次第に増幅されていく。貂蟬がどの段階で舞台上に登場するのは、いまひとつはつきりしないが、この曲が唱われた後に貂蟬が舞台に姿を見せていることは疑いない。何故なら、続く「脱布衫」の曲の冒頭に、貂蟬への呼びかけの言葉が認められ、関羽が、自分の言うことを聞くようにと諭しているからである。続く四曲では、呂布の生前の活躍が賞讃的口調を伴って語られる。呂布に対する関羽の心情が浮き彫りにされている歌である。

【脱布衫】貂蟬女聽我良言。我關羽正直無偏。俺想漢乾坤猶如鐵卵（鉤），都只為董卓王虎威推冠。

（貂蟬よ、とくとわしの言を聞け。拙者関羽は公平そのもの。想えば董卓王が虎勢を顯示し、漢の天下は鉄錐の如し。）

【小梁州】（關）倚着那英雄豪傑呂鳳仙。端的有武藝千般。他那裡虎牢關下破孫堅。龍泉劍將天下量如綿。

（英雄豪傑鳳仙の、武芸百般頼みとす。あいつときたら、虎牢関にて孫堅破り、龍泉劍もて、天下を綿の如くにみなしたり。）

【幺】（又）想着他英雄獨把諸侯戰。誰肯保漢室周全。若不是曹公舉薦。他則是談笑取中原。

（かの英雄、独り諸侯を相手に闘い、漢室を、守れる者がどこにしよう。曹公が、仮に推薦しなかつたなら、あやつめは、いともたやすく、中原手中に収めたであろう。）

【上小樓】（又）他將那兵機教演。三軍操練。你看他劍戟光輝歷明甲燦。擺列着陣勢圓。殺氣寬。排兵可羨。險些兒搖拽動四方八面。

（用兵準備し、三軍教練怠りなし。見よ奴の、劍戟輝き兜はキラキラ。円陣ぐるりと整えて、殺氣は満ちて、うならんばかりの布陣の妙。あたり四方を、すんでのところ揺さぶり動かす。）

訳文によって明らかなように、ここには虎牢関におけるかつての呂布の戦いぶりが讃辞を尽くして語られている。「英雄」「豪傑」と

いった呼称が何度も現れることから、呂布に対する関羽の並々ならぬ思い入れが窺える。かりに曹操が自分を推薦して呂布と対峙させなかつたら、今頃漢王室は呂布の手に落ちていたであろう、とまで述べて、その優れた武勇を称える気持ちを顕わしている。つまり、関羽は呂布を稀代の「英雄」として認め、その不遇の死を惜しんでいるのであり、その気持ちはそのまま、呂布を窮地に追いやった張本人としての貂蟬への憎しみとなって溢れてくる。一方、貂蟬の方はというと、どうやらそうした関羽の切々たる思いを理解できなかったらしい。関羽のご機嫌を取り結ぶためもあつてか、呂布を擁護するどころか、逆にその行為を臆病者の所業と罵つて、関羽の怒りを決定的なものにしてしまう。次の二曲は、貂蟬の言葉を受けて関羽が猛烈に反撥する内容となっている。

【幺】（又）你道是温侯懦弱，他怎肯把中原侵占。想着他領將興兵，臨垓布陣，馬不停閑。天地間日月邊。只見他殺得衆諸侯膽寒心顫。

（そなたの語るところによれば、温侯どのは意気地なし、中原なんぞ侵犯できるはずもなし、とな。想えば呂布は、將兵率いて戦地に布陣、戦馬休める暇なく、天地の間に昼夜を問わず、目に入るは、諸侯相手にあくまで戦い、心胆寒からしめたる姿。）

【快活三】想温侯呂鳳仙。聽着不良言。百〔白〕門斬首命歸泉。却是你將他陷。

(想えば温侯呂鳳仙、よからぬ言を真に受けた。白門で、首切り落とされて黄泉路に帰せしは、そなたが陥れたもの。)

ここに至って批判の矛先はついに貂蟬自身に及ぶこととなる。常に勇猛果敢に戦を展開していた呂布が白門で捉えられるはめになったのも、全ては貂蟬の良からぬ諫言を受け入れたからである、と断定して、呂布を死に追いやった責任を追及する構えを見せ始める。

ここに言う「良からぬ言」が具体的に何を指すかは明らかでないが、『演義』に拠って推測するならば、援軍を求めるために敵陣突破を試みようとする呂布を、貂蟬が引き留めたことを指すのかもしれない。いずれにしても、関羽の立場から見ると、貂蟬が呂布に対して取った態度は「不良」と映っているのであり、関羽を前にして呂布を悪し様に罵る行為が、不信感をますます増幅させることになったであろうことは想像に難くない。関羽の怒りはついに極点に達し、貂蟬への殺意が明確に吐露されることとなる。

【朝天子】〔又〕貂蟬近前來、聽關羽語言。你却也無良善。

誰知你不賢。其心不正、你可也天生得你賤。休要怨天。你可也不端。我交你兩口兒重相見。

(貂蟬や、近くに寄って、関羽の言をとくと聞け。お前も

ともと良心なし。何とお前は不徳の輩。持てる心は正しからず、生まれついでなまの卑しい性。お天道様を怨むでないぞ、はしなくも、お前ら夫婦を再会させよう。)

【四邊靜】〔又〕想着你唆呂布全無些諫忠言。你我無緣。你

今日曹〔邈〕刑憲。立在我案邊。怎隄防我昆吾劍。

(想えばお前は、呂布そそのかし、諫める言葉をかけるでもなし。お前とわしとは、赤の他人。今日は処刑を受ける運命。わしの裁きの場に立てば、昆吾の劍は免れがたい。)

「昆吾の劍」という言葉を耳にして、貂蟬は迫り来る身の危険を察知せざるを得なかったであろう。関羽の情けを請う意図もあつてか、ただちに、さかんに自らの功績を述べ立てたようである。しかし、貂蟬の意図とは裏腹に、関羽の怒りは収まるどころか、逆に火に油を注ぐ結果となつてしまった。次に唱われる「滿庭芳」の曲辞は、関羽のそうした心情を余すところなく伝えている。

【滿庭芳】〔又〕你道是温侯弄權。誅了董卓也只為貂蟬。那

時節不肯把親夫勸。如今不得團圓。我跟前一將他貶。賣弄你巧語花言。你這般唇舌、使温侯柔軟。直乃是謾人言。

(温侯どのが権勢ふるい、董卓を、誅殺したのも、貂蟬の御蔭。お前はそうだと嘯うそぶくか。夫を諫めなかつたばかりに、

いまとなつては離ればなれ。わしの前で、呂布の悪口並べ立て、二枚舌をひけらかすとは。まさにお前のその舌が、温侯をしてへなへなになせさせた。全くもつて、人貶める言葉そのもの。

「巧語花言」は関羽の最も忌み嫌うところである。「二枚舌」の貂蟬を生かしておいては、いつ又舌禍が自分に及ばないとも限らない。ここに至つて、関羽はついに、貂蟬を斬る決意を固めた。最後に唱われる【耍孩兒】から【煞尾】までの七曲⁽²⁾において、名劍が邪悪を退治した故事が引用され、「昆吾の劍」への賞讃とともに、貂蟬を殺害するまでの様子が事細かく描写されて、関羽の一連の歌は終結する。

六

前章において細かく検討したように、明代の演劇空間にあつては、貂蟬は関羽に斬り殺される運命にあつた。たとえ一時的であつたにせよ、貂蟬は呂布と行動を共にし、手厚い庇護を受けていた。が、呂布が討たれた途端に、掌を返したように関羽になびき、呂布の英雄ぶりに未練を示すどころか、逆にその非を宣揚するかのときき発言を繰り返す。保身のためのやむなき所作とはいへ、その変身ぶりはあまりにも心ないものであり、そこには忠義心のかげらもない。そのような貂蟬を前にしては、「義」の化身ともいふべき関羽の忍耐

力は、もはや限界点に達し、結果として、貂蟬は関羽の振り下ろす名劍の錆びと消えてしまふのである。

こうした貂蟬殺害のプロットを有する作品は、前掲「大全」のみでなく、明代の他の戯曲にも存在する。ここでは、その一例として、萬曆年間に胡文柄によつて編纂された『群音類選』所収の「桃園記」⁽²⁾について検討してみよう。「桃園記」には「関斬貂蟬」なる題目の下に、「耍孩兒」「滾」「煞孩兒」など合計十三曲の歌辞が収められている。歌唱者は関羽と貂蟬の二人であり、はじめに関羽が「春秋」を讀みつつ世の盛衰を嘆く場面が描かれ、続いて、貂蟬が登場して、関羽の前で身の不幸をあれこれと述べ立てる。当然、伴侶である呂布を失つたことにも触れることになるのだが、貂蟬の身の上話を聞いた関羽は、すかさず、古今の英雄は誰か、との質問を投げかけて、貂蟬の心底に潜む「不義」を暴くきっかけを作り出す。

【耍孩兒】看貂蟬，佞舌便。論英雄誰數先。誰人慣馬能征戰。誰居帷幄能籌策，誰居帷幄能籌策，誰箇當鋒敢向前。你為我言一遍。只許你直言無隱，不許你巧語花言。

(貂蟬はなかなかの口達者。英雄論と相成れば、誰を先に挙げるべきや。馬術に長けて、戦に慣れたる者は誰。陣営で、戦策練るなら誰が一番。陣営で、戦策練るなら誰が一番。先頭きつて、敵陣突撃果たすは誰か。ひとわたり、そなたの意見を言うてみよ。正直に、包み隠さず申してみよ。言

葉巧みな、二枚舌は許さぬぞ。」

この質問に対する貂蟬の回答は以下のようなものであった。

【耍孩兒】念奴家，尚幼年。不能知古聖賢。只聞得今人幾箇能征戰。三位將軍是英雄漢。劉關張是英雄漢。那數無名呂奉先。他跟脚由來賤。他只是馬前走卒，怎上得虎部名班。（わたくしは、年端もいかぬ幼き身。いにしへの、聖賢さまは存じませぬが、今どきの、戦上手を挙げるとなれば、三人の、將軍どのこそ英雄そのもの。劉・関・張こそ英雄そのもの。無名の輩、呂布などものの、数でなし。あやつめは、もともと素姓の卑しい男。たかが馬前の一兵卒、名將の、部類にやとうてい入れませぬ。）

既に明らかのように、ここには呂布を英雄として評価する姿勢は微塵も感じられない。評価するどころか、あべこべに呂布の「素姓が卑しい」とまで述べて、あくまで関羽らのご機嫌を取り結ぼうと懸命になる。だが、貂蟬の意図とは裏腹に、関羽の心には却って貂蟬に対する不信の念が広がっていく。続いて唱われる次の曲辭は、貂蟬に対する関羽の不快感を如実に示すとともに、貂蟬殺害の決意が顕わにされたものである。

【耍孩兒】你今日棄温侯，來近關。倘或你棄咱每，又近那邊。迎新又要將咱貶。惱得我渾身骨肉兢兢戰。氣滿胸膛口吐烟。罵你箇真潑賤。也是你前生注定，這災難難免目前。

（今日のところは、温侯棄てて、拙者関羽の肩をもつか。もしもわれらを棄てるとなれば、はたまた誰の、肩をもつやら。新たに人を迎えれば、われらをけなすこと必定。怒りのあまり、全身わなわな震えたち、胸に怒りの気は満ちて、口から煙りを吐かんばかり。このろくでなしのあばずれ野郎め。これも前世で背負った運命、この災いが、身にふりかかるのは避けられぬ。）

曲辭が示すように、関羽にとつて最も嫌悪すべきものは、二枚舌を武器に次々と変身を遂げ、大樹に寄りかかつてあくまで保身を圖らんとする貂蟬の「不義」の姿であった。貂蟬が美貌の持ち主であるだけに、このまま生かしておいては、いつ又何時災禍がわが身に及ばぬとも限らない。ここに至つて、関羽はついに貂蟬の殺害を決意する。この曲に続いて唱われる内容は、「大全」の場合とほぼ同じく、名剣を片手にその功績を様々に述べ立てた後、貂蟬の首が落ちて鮮血がほとばしる様を描いて、関羽の歌は終結する。

七

以上見てきたように、明代の演劇空間にあつては、呂布亡き後の

貂蟬の運命は、いったん関羽のもとに送られて周辺の世話役をつとめるものの、「不義」の心を見透かされ、関羽の怒りに触れて非業の最期を遂げる、というものであった。王允の命令に従って董卓を討った後、さしたる活躍の場も与えられずに何処へともなく消え去っていく『演義』とは全く異なる運命が、貂蟬に用意されていたのである。本稿で取り上げたのは、主として明代の演劇に於ける貂蟬の姿であるが、実は、演劇以外の芸能、たとえば語り物の世界にあっても、貂蟬はやはり関羽に斬り殺される運命にあった。そのことは、清代に広く流行した「彈詞」²⁴や、近年公刊されて斯界の関心を集めた『蒙古車王府曲本』所収の「子弟書」²⁵などによって確認することができる。そこに描かれた関羽と貂蟬とのやりとりは、演劇空間のそれに較べると相当複雑なものになっており、関羽の質問もますます広汎多岐にわたって、回答の停頓を期待して次々に難問を繰り出す関羽と、ためらいながらも難問に答えていく利発な貂蟬との問答そのものを延々と楽しむような作品も生み出されている。ここではもはや、そうした作品の一つひとつに立ち入って細部を検討する余裕はないが、語り物の世界に於ける貂蟬の形象に関しては、他に論を成す専門家もあると思われるので、そちらに譲ることにして、最後に、貂蟬にまつわる一つの問題を提起して、本稿のまとめに代えることにする。

本稿を草するに至ったそもそのきっかけは、兼ねてより抱いていた貂蟬の処遇に関する一つの疑問であった。それは、関羽が貂蟬

を斬る、というプロットが、何故小説『三国志演義』に採り入れられなかったか、という問題である。既に見てきたように、関羽が貂蟬を斬り殺すプロットは、十六世紀前半、明代嘉靖年間には確実に存在していた。しかも、貂蟬の物語としては、関羽によって斬られるという結末の方がむしろ一般的でさえあったと思われる。第三章で触れた王世貞の発言はそれを証明するものであり、小説の編者がそうした状況を知らなかったとは到底考えられない。にもかかわらず、『演義』の編者は、関羽と貂蟬との接点を敢えて消し去り、貂蟬の末路を極めて曖昧な形のまま放置した。明代以降、『演義』は様々な版本を生み出していくが、清代の版本に至っても、そうした姿勢は一貫して変わることがなかった。それは何故か。関羽と貂蟬の交渉を敢えて小説のプロットからはずしたのは、小説の編者のいかなる意図によるのか。

右の問題に対しては、様々な角度からの検討が必要となるであろう。第一に考慮されるべき点は、小説と、演劇もしくは語り物、という、表現手段の相違と、それに伴う受容者層の問題である。文字に頼ってストーリーを追いかけるという個人的営為を前提とした小説と違って、専ら視覚と聴覚を媒介とする演劇は、観客の熱い吐息に支えられて初めて興行の成功が約束されるのであり、時には舞台の緊張を高めるための意表を突いた展開も必要となってくる。関羽の振りかざす名劍の下で美貌の貂蟬が鮮血に染まる、という設定は、確かに、三国志の一般的展開に慣れた観客の退屈を破るに充分な効

果をもちえたであろう。「不義」の汚名を着た貂蟬を斬り捨てることで、「義士」としての性格を全うした関羽に、観衆はさぞかし喝采を送ったことであろう。受容され鑑賞される空間の相違、それがもたらすプロットの変化は、確かに考慮すべき重要なポイントであるように思われる。

表現手段の相違とあわせて無視できないのが、作品が生み出された当時の出版界の状況や、それを支える文化的背景であると思われるが、ここでは、それら全てを今後の検討課題として認識した上で、敢えて未熟な段階での私見を提示しておきたい。結論から先に言えば、小説の編者が関羽に貂蟬を殺させなかったのは、小説全体に流れる関羽のイメージを破壊しないためであった、と考える。周知の如く、『演義』の中の関羽は、一貫して、劉備にあくまで忠誠を誓う「忠義の士」として描かれている。曹操に囚われた後の関羽の一連の行動は、関羽に付与された「義」の性格を示すに充分なものであるが、もし仮に、物語の前半に貂蟬を殺す一段を加えてしまったとなると、関羽の雄々しい義士としての形象はどうなるか。答えは明らかであろう。いかに不義な相手ではあっても、何の抵抗もしない一人の人物を斬り殺したとあっては、雄々しき義士としての関羽像に疵がついてしまう。しかも、相手は、一時的にせよ、漢王朝滅亡の危機を救うに功あった、かよわい女性である。そのような人物を早々と斬り殺してしまったのでは、却って関羽の名を貶めてしまう。敢えて関羽の手を汚させてまで貂蟬を抹殺するには及ばない。「連

環の計」をみごと成功に導いた時点で、貂蟬の活躍には静かに幕を引くのが得策。そのような計算が『演義』の編者に働いたのではあるまいか。無論、現時点では右の見解は単なる憶測の域を出ないのである。先述の諸々の要素を考え併せたうえで、今後さらに検討を重ねる必要がある。

ともあれ、架空の人物としていつしか三国物語に登場した傾城の美女貂蟬は、董卓討伐の切り札として存分に活躍し、殺伐たる描写に終始しがちな戦記物に極彩色の色合いを添えた。吕布亡き後の処遇としては、小説の世界では、曹操のもとに引き取られたまま消息不明になってしまうものの、語り物や演劇の世界では、幕引きの場面が新たに用意され、「義士」関羽の手にかかって華々しい最期を遂げることになる。考えてみれば、いかに末路が悲惨なものであれ、「連環の計」以降に改めて活躍の場を与えられた貂蟬には、それを支えるだけの魅力が備わっていた、ということになるのかもしれない。

注

- (1) 『三国志演義』のテキストに関しては、特に注記しない限り、本稿では、現存する最も古い刊本である所謂「嘉靖本」に基づいて記述する。
- (2) 卷之二「王允授計誅董卓」の一段に、「吕布到郿塢，先取了貂蟬，送回長安。」とある。
- (3) 曹操軍に囲まれた吕布は、陳宮の進言を容れて袁術のもとに援軍を借り受けに行こうとするが、妻の嚴氏は涙ながらに吕布を強く引き留める。決しかねた吕布が続いて貂蟬に相談をもちかけると、貂蟬は言う、「將軍殿にはどうかわたくしのことを専ら念頭に置かれ、単独で敵

陣突破するような真似はおよそでございますよう(將軍與妾作主、勿輕騎自出)。

(4) 卷之四「曹孟德許田射鹿」の一段に、「操將呂布妻小并貂蟬載回許都、盡將錢帛分備三軍」とある。

(5) 曹操軍に下邳を包圍されて孤立した呂布は、陳宮の進言を容れて兵力を二分しようとするが、それを聞いた貂蟬は泣きながら呂布に訴える。以下、二階堂善弘・中川論訳注『三國志平話』(一九九九年、光栄)によって貂蟬の言葉が挙げておく(一〇二頁)。「奉先どのは覚えておられませんか。先に丁建陽どのが臨洮にて乱を起こされたとき、馬騰の軍勢が押し寄せ、わたしども夫婦は離散いたしました。前後三年ものあいだ会うことができませんでした。そして、董卓を殺したため、行くところがなくなってしまう、関東に逃げ、今は、徐州を失いました。曹操の軍勢が下邳を包圍しているのに、味方の手を二手に分けてしまつたら、兵力は、かえって統かないことにはありませんか。もしまたお別れするようなことになつてしまつたら、いつまたお目にかけますやらわかりませぬ」。

(6) 清、姚燮撰『今案考証』著録。このほか、『宝文堂書目』(明、晁瑛撰、『也是園書目』(清、錢曾撰)などにも記録されているが、ここでは「月夜」を「月下」に作る。

(7) 明、祁彪佳撰『遠山堂劇品』には、「斬貂蟬」なる演目が掲げられており、そこに「北五折」と注記されている。「北」とは「北雜劇」の意味であり、「五折」とは、それが五幕構成であったことを示している。

(8) 外題に「斬貂蟬」とあるからといって、必ずしも関羽が貂蟬を「斬り殺した」とは限らない。中国語としては、この外題を、「斬り殺そうとした」とも解釈できるのであり、実際に殺したかどうかについては断言できない。何故なら、例えば、無名氏作の三國劇「寿亭侯怒斬関平」のように、外題に「斬」の一字が含まれていても、実際には斬るところまでいかない作品もあるからである。しかし、後の資料によって見る限り、貂蟬はやはり実際に斬り殺されたらしい。この点につい

ては後述する。

(9) 詩の全体を原文によって示しておく。「董姬昔為呂、貂蟬居上頭。自誇預帷幄、肯作抱衾嫗。一朝事勢異、改服媚其仇。心心托漢壽、語語厭温侯。忿激義鶻拳、皆裂丹鳳眸。孤魄殘舞衣、腥血濺貝鈎。茲事豈必真、可以快千秋。旦聞抱琵琶、夕弄他人舟。售者何足言、受者能不羞。寧如楚虞姬、一死不徇劉。」(弇州統稿)卷六・詩部・五言古詩)

(10) 清、焦循『劇說』卷二の引用に基づく。

(11) 関索の説話については、『花関索伝の研究』(一九八九年、汲古書院)を参照。

(12) 正式な書名は「新刊校正古本大字音釋三國志通俗演義」。明萬曆十九年刊。国立公文書館所蔵本による。卷二第九十五葉裏、第七行目の本文「貂蟬載回許都」の後に、「補遺」として双行の注を載せる。

(13) 「狂嶽委談」の中に次のような言及がある。「斬貂蟬不經見、自是妾巷之談。然關公傳注稱、關公欲娶布妻、啓曹瞞。曹疑布妻有殊色、因自留之。則非全無謂也。」

(14) 『三國志演義』「毛宗崗本」の「凡例」には次のような言及がある。「後人捏造之事、有俗本演義所無、而今日傳奇所有者、如關公斬貂蟬、張飛捉周瑜之類、此其誣也、則今人之所知也。有古本三國志所無、而俗本演義所有者、如諸葛亮欲燒魏延於上方谷、諸葛瞻得鄧艾書而猶豫未決之類、此其誣也、則非今人之所知也。」(傍点筆者)

(15) エスコリアル宮殿所蔵の『風月錦囊』は初版本ではなく、嘉靖三十二年(一五五三年)に重刊されたもので、刊行後わずかに二十年を経た一五七二年頃には、早くもエスコリアル図書館に収められたことが判明している。該書の書誌については、近年発表された黄仕忠氏の論文『風月錦囊』刊印考(『黄天驥主編『中国古代戲曲與古代文学研究論文』中華書局、二〇〇一年)に詳しい考証があり、又、スペイン流入の詳しい経緯については、『風月錦囊箋校』(二〇〇〇年、中華書局)の「前言」、及び、『風月錦囊考釈』(孫崇瀾著、二〇〇〇年、中華書局)第八章に詳しい説明がある。

(16) 本書を手がかりとして明代における三国故事伝播の状況を探った論考として、上田望氏の「明代における三国故事の通俗文芸について」(『東方学』第八十四集所収)がある。また、前掲『風月錦囊考釈』(孫崇濤著、二〇〇〇年、中華書局)第七章にも、その全体像についての詳細な解説がある。

(17) 正確な場面の数は不明であるが、ここではとりあえず『風月錦囊考釈』(孫崇濤著、二〇〇〇年、中華書局)第七章に掲げる一覧表に従っておく。

(18) この点もやはり、『風月錦囊考釈』(孫崇濤著、二〇〇〇年、中華書局)第七章に掲げる一覧表に従う。

(19) 以下、本稿に引用する該書の原文は、王秋桂主編『善本戲曲叢刊』第四集(一九八七年、臺灣學生書局刊)所収の影印本に拠るが、一部不鮮明な部分については、孫崇濤氏の『風月錦囊箋校』(二〇〇〇年、中華書局)を参照した。なお、影印本による判読不能な文字は空格□で示し、「」内に示した文字は、直前にある文字を校訂したものである。

(20) ここでの「王」や「駕」が具体的に誰を指すか、前後の文脈が欠けている以上、未詳とするしかないが、離別後初めて呂布に逢った点を考えると、董卓討伐の後とは考えにくい。董卓を「駕」という言葉で表現することは実体には合わないが、貂蟬の目から見ると、権勢を恣にしている董卓はまるで「天子」同様に見えたのではあるまいか。

(21) 以下に七曲の原文のみを示しておく。

【耍孩兒】昆吾劍賽過吹毛劍。出鞘離匣龍吐淵。穆王曾鑄金鸞殿。治家邦伐佞除奸。天下得由三尺取，袖內携來四海安。曾把白蛇斬。在朝內誅了讒佞，關外掃塵烟。

【五煞】昆吾劍氣雄，殺聲似有奸。龍光端射明如電。莫不是貂蟬敢有虧心事，我關羽全無半點冤。咱劍殺聲響曉，在你雙肩。

【四煞】射長空，貫斗牛倚長空鬼魅潛。英雄得此憑除亂。一條晴電光難掩。蒼天龍泉今古傳。如素練。想着那安昌侯張禹，也曾咬(交)此劍除奸。

【三煞】關羽手內提，要在你貂蟬項下懸。也是你前世注今生限。你雖不是江邊別楚虞姬女，我交你月下辭咱命染泉。休埋冤。則為你花嬌貌美，我惱你是綠鬢朱顏。

【二煞】明晃晃劍離匣，光輝輝龍吐涎。古都都鮮血如紅茜。厮朗朗扯動鑼環響，赤漫漫油頭落粉肩。跳酥酥香肌顫。長舒舒羅衣褊體，蓋撲撲倒在堆前。

【一煞】則為你嬌滴滴貌似花，美孜孜有玉顏。我氣咩咩惡怒心間。恨你三魂香歸陰府，我四海揚土(揚)名譽傳。無瑕玷。你暗地裡口甜心苦，絮叨叨巧語花言。

【煞尾】今日除病根掃退身邊患。也是我忠心不克行方便。免得你墨翰無功將咱貶。

(22) 『群音類選』「官腔類」卷十二。『群音類選』の正確な刊刻年代は不明であるが、概ね萬曆二十年代の前半と推定されている。一九八〇年、中華書局影印本による。

(23) 名剣を振りかざしつつ唄われる歌は、部分的に、『風月錦囊』所収『三国志大全』の曲辭に酷似しており(【耍孩兒】【三煞】【二煞】など)、両者の間には明確な繼承關係が認められる。

(24) 清乾隆元年、二十卷本抄本『三國志玉璽傳』(鄭州市圖書館藏)があり、卷三や卷六などに貂蟬が登場する。そこでの関羽は些か陰險な性格に描かれており、命乞いする貂蟬を許すふりをして油断させ、不意打ちにされる。なお、同書の校点本が、一九八六年、中州古籍出版社から刊行されている。

(25) 一九九一年、首都図書館影印本。一九九三年には、江蘇古籍出版社から活字本の『清車王府鈔藏曲本 子弟書集』(上下)が刊行され、第三卷に、関羽と貂蟬の問答を描いた「十問十答」が含まれている。

Examination of the Image of Diao-Chan

Taizan Inoue

'Sanguo-Yanyi' is a fictional novel based on historical facts. Many of the characters actually existed in the history. On the other hand, being a fiction, some fictitious characters were desired in order to produce dramatic developments in the story. A typical example of the latter is Diao-Chan. Using her inborn beauty and brilliant conversations, she estranged the military clique, Dong-Zhuo, and his adopted son, Lü-Bu. She successfully achieved the 'Lian-huan-ji' on the order of Wang-Yun, aide to the Emperor, and was brilliantly active for a while. But after destroying Dong-Zhuo as planned, she didn't attract much attention and disappeared from the scene unnoticed. However, in media other than novels, such as plays and narratives, Diao-Chan had other appearances. In this paper, using newly discovered materials from Monasterio del Escorial in Spain, the image of Diao-Chan after the 'Lian-huan-ji' is carefully pursued in the attempt to throw light on a different Diao-Chan from the one portrayed in the novel.